

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.27)

「まさかのときこそ真の友」

…日墨交流400年を迎えて…

日本ではメキシコについては、テレビの紀行番組で時々取り上げられる程度で、余り話題にも上がらないと思うのだが、日本とメキシコの関係は意外と古い歴史を持っている。日本とメキシコの友好の出会いとは、どのようなものだったのだろうか。

今年、2009年からちょうど400年前に遡って、物語風に再現してみよう。時あたかも、1609年(慶長14年)9月、スペイン領フィリピンから、メキシコへ帰国途中の373名を乗せたガレオン船、サン・フランシスコ号が千葉県沖で遭難、317名が岩和田(現御宿町)村民に救助された。

見慣れない外国人ゆえびっくりしたことは想像に難くないが、この時村人は大いに同情し、凍えた異国の遭難者を、海女たちは素肌で温め蘇生させ、夫の着物を着せ、食糧を惜しみなく提供したという。村民の手厚い保護を受けた後、時の将軍、徳川秀忠に謁見し歓待を受けるとともに、駿府城の徳川家康にも招かれ、破格の歓待と豪華な贈り物を受けるなど親しく懇談し、翌1610年家康が、三浦按針に建造させ提供された新しい船で、無事メキシコへ帰国した。

その船は、太平洋を横断した日本船第一号で、なかに、メキシコを訪問した最初の日本人となった、20数名の日本人も含まれており、この史実が、日本とスペイン・メキシコの修好の契機となっている。

ここで、今回のタイトルに使った、「**En el peligro se conoce al amigo**」(エン エル ペリグロ セ コノセ アル アミーゴ と発音し、直訳は危難のときに友を知る)という諺が登場したのである。

諺本来の使い方とは、若干ニュアンスは異なるが、まさにまさかのときであり、幕府のしたことは、現在、日本が思いやり予算と名乗ってはいるが、実際は某国への軍事協力となっている多額の支出金と違って、将来へ役立った、思いやり予算をまさかのときに、スパッと使ったと言うのでなからうか。

「織田がつき羽柴がこねし天下餅 すはりしままに食ふは徳川」だとか、「鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトギス」と詠われたり、狸おやじなどと揶揄され、歴史学に疎い私などは、我慢強さと狡賢さだけの人とっていたので、

「やるときは意外にやるもんだね、徳川さん、見直したよ」と、この件に関しては言いたいところだ。

この400周年を記念して、多様な催し物が行なわれたのだろうが、同じような2つの行事を見学した。その内の一つは、メキシコの主要通り、レフォルマ通りの一部を土・日と閉鎖して行なわれたイベントで、大使館、JICAを始めとした、日系関係の数多く



サン・フランシスコ号の1/50
模型 (御宿歴史資料館蔵)



のブースがならび、日本文化の紹介(折り紙、書道、草月流生け花等)、車などの最新技術の紹介、観光促進、日本食やメキシコの地方物産品の販売等が行われていた。

月改まった別の週には、首都からバスで約1時間半の所にある、近郷のイダルゴの州都パチュウカ市でのイベントを見学した。首都のイベントと比較して、規模は小さいものの、実施にあたっては、この地域に JICA



から派遣された、青年海外協力隊の隊員が少なからずかかわっていたという。

さらに、当日には開催地近郷に派遣されている、男女の隊員が応援に駆けつけていて、あまり暖かでないこの日、全員がユカタ姿で展示物や催し物の説明、折に触れて折り紙作りなどを指導していた。

このように若者が一所懸命に、何事かに没頭しているのを見ると、すでに老境に入って涙腺も緩みがちな、ボラッチョ・ボニート氏としては、思わず目頭が熱くなってくる。

同行したワイフも同じ気持ちだろうか、折り紙づくりで悩んでいる、地元の子供たちのために、隊員たちと主客転倒しないように陰で助言していた。

催し物や展示品を見学している間、われわれのような年寄りにまで、一緒に写真を撮りたいという人が、何人か現れた。恥ずかしながら、彼女らのデジカメやカメラつき携帯電話の、被写体に収まったが、首都の人口の多い地域と比較して、人情の機微にも触れた出会いだと思っている。

いわば手作りの民間外交を行なったというところであり、公式の華々しい外交戦略による親善も、もちろん大切であろうが、目立たないところでの民間外交も、国を理解してもらうには必要だと思う。

1888年11月には、日墨友好通商航海条約が結ばれた。これは日本にとっては初めての(アジア除く)治外法権が無く、関税自主権のある平等条約であり、メキシコにとってはアジアの国と初めて締結した条約でもある。

このほか、メキシコは日本の中南米移住の先駆けであったり、関東大震災、第二次大戦後の処理など、歴史的節目では、タイトルに述べたように、日本へ特色ある友好的な対応をしており、メキシコで仕事をしなかったなら、知らないで過ごしてしまった出来事が多く、良い機会を得たなあというのが実感である。

メキシコにとっても、来年2010年は、独立200周年と革命100周年が重なり、とても重要な年になる。

テキーラの杯をちびりちびりとなめながら、歴史を考え、さらにロマンが無いかと思いを馳せながら、日本とメキシコの間を時空を越えて行き来し、少しでも真の友となるべく、考えるのも意外と面白いものだ。

結果的に、本メキシコ便りの題材も増えてくるかも知れない。もう金輪際ごめん被るなどといわないで、期待していきましょう？

(2009年12月19日、配属先では、18日に今年の仕事が終わりましたが、短期の小旅行のほかは、年末年始は、家で来年早々の業務のための資料を作る予定です)

次のページにも写真があります



こんな所にも日本の影響があった。……アジアへの布教のため太平洋を渡った宣教師たちが、航海の無事を祈念した、フランシスコ会修道院(クエルナバカ)の聖堂の壁一面に描かれた、長崎大殉教を描いた大壁画の中に、(上記赤線内)
“EMPERADOR TAYCOSAMA MANDO MARTIRIZAR POR…”
(将軍タイコウサマ(秀吉)は殉教を命じられた…)という文字がある